

パビリオン
THE PAVILLION
山椒魚
“Salamandre”
のハ



オダギリジョー 香椎由宇

高田純次 麻生祐未 光石研 KIKI キタキマユ 斉藤陽一郎 杉山彦々 津田寛治

脚本・監督: 富永昌敬 音楽: 菊地成孔 主題歌: 万波麻希 & 菊地成孔「KEEP IT A SECRET」(作詞: 富永昌敬 作曲: 菊地成孔)
製作: 東京テアトル/スタイルジャム/ミュージック・オン・ティーヴィー 配給: 東京テアトル/スタイルジャム 宣伝: ミラクルヴォイス ©2006 パビリオン山椒魚パートナーズ

www.pavillion.jp

浅草・花やしき仕様の、ジェットコースター・ムービー。

二人の天才が絶賛する若き監督が待望の長編デビュー!
富永昌敬(30歳)は、大物である。『パビリオン山椒魚』を初号試写で観て、そう確信した。

トミナガマサノリの名前は、僕が敬愛する二人の天才を通じて知った。日本の笑い小劇場のPOPな流れを作った男と呼びたい、劇作家・演出家・小説家の宮沢章夫は、短編シリーズ『亀虫』(02/03)を「綿密に計算されたいいかげんさが見事だ」と絶賛。総監督作『be found dead』(04)の中の1編(『オリエン・テリング』)の脚本・監督を富永に依頼した。

9.11以降のカルチャー・ヒーローと書いても過言ではない、音楽家・音楽講師・文筆家の菊地成孔は、自身の勝負アルバム『南米のエリザベス・テラー』(05)のオリジナル・イメージ映像(『京マチ子の夜』)の演出を富永に依頼した。

そして、前作『シャリー・テンスル・ジャポンpart II』(04/05)を観た筆者は、今の日本の知的な把握と下世話な話題が同居する構造に昇天。次作を観るまで、死にたくないと考えた。

山椒魚が、レントゲン技師と女子高生をキュービッドする?

美人四姉妹——アキノ(麻生祐未)、みはり(KIKI)、日々子(キタキマコ)、あづき(香椎由宇)がいる二宮家は、代々「サラマンドル・キンジロー財団」を運営。15代將軍慶喜公によって1867年のパリ万博に出品された「動物国宝」のオオサンショウウオ「キンジロー」(=二宮金次郎?)を管理することで、国から莫大な援助金をもらっているらしい。ある日、自称「21世紀の天才レントゲン技師」こと飛鳥芳一(オダギリジョー)は、第二農響・会長の香川守弘(光石研)から「キンジローにこそモノノ疑問が浮上中だ。本物なら、パリ万博で骨折した際の治療の跡が背骨に残っているはず」と、山椒魚のレントゲン撮影を依頼される。芳一は、妹・甲斐の結婚費用100万円と引き換えに、引き受けた。

一方、みはりと日々子に家を追い出された父・四郎(高田純次)は、あづきに「悪いやつらに狙われないように、キンジローを安全な場所へ移して、お前がまだ見ぬママに会いに行こう」と持ちかける。あづきは、次女三女とは腹違いのようだ。

キンジローの150歳のお誕生パーティが、二宮家のジャポネスクな豪邸で盛大に開かれた夜、芳一はあづきと不思議な出逢い方をしてしまう……。

鈴木清順、ルイス・ブニュエル……富永昌敬。

ナレーションの迫剰さ——わかりやすく説明するための、ではなく、解釈を拡大させるための。映像の美しさ——世界初か? レントゲン車内に溢れるシャボン玉のシーンには、心が弾んだ。構図の心地よさ——女優や風景を部分から全体へエロくなめ、役者たちが固定のフレーム内で活き活きと動き、ときに見切れる。会話の面白さ——いわゆるオブ・ビートのではなく、リアルな喋りとナンセンスな発言がまだらに進行していく。

演出のハイフリッドさ——たとえば、香椎がシリアスな演技をしている後ろで、オダギリはコント的な演技をやっている。

と、『パビリオン山椒魚』は、旧作でも汚れたっていた独特な映画術をヴァージョン・アップしながらも、物語は、富永監督史上、最もテラメな展開をする。ナイス・パッケージで、豪華な俳優陣が揃った、大事な長編デビュー作であるにも関わらず。

そもそも、ロケ地は今の日本なれど、筒井康隆の小説『美登公』(81)が映画本位制のもう一つの日本を描いたように、山椒魚本位制が敷かれているかの如きパラレルワールドだ。

しかも、フィルム・ノワールなのか? と酔っていたら、中盤から『モンティ・パイソン・アンド・ホーリー・グレイル』(75)と通じる世界に連れて行かれ、観客は唖然とする。ええええええええ! 僕は、鈴木清順の『世しの烙印』(67)や、ルイス・ブニュエルの『フルジョワジーの秘かな愉しみ』(72)を観たときにも似たうろたしい悲鳴を上げた。

そのせいか。菊地成孔も、「ハイ、喜んで」と、ジャズからエレクトロニカ、おまけにマーチまで! 映像とあうんのコール&レスポンス、そう、SEXしているかのような音楽をクリエイトしている。

「あづき・イン・ワンダーランド」か、笛竹村版『ワイルド・アット・ハート』か。

ハリウッド製の何も考えないで楽しめるエンタテインメント映画のことをジェットコースター・ムービーと呼ぶのに習えば、『パビリオン山椒魚』は真逆、いや、浅草・花やしき仕様のジェットコースター・ムービーだ。民家すれすれに、軋みながら、爆走する怖さと楽しさ。富永映画は、観客の脳内に「なぜの嵐?」を巻き起こしながら暴走していく。結果、僕らは客席にふんばりながら目と耳をフルスロットルにさせねばならない。

関西のカルト芸人・大空テンのギャグに「わからない人は置いてきますよ。義務教育やないんやから」というのがあつたけれど、富永監督はハードコアなテント主義者と言い換えることもできるだろう。

少女の成長物語として見れば、『あづき・イン・ワンダーランド』であり、恋の盲目作用により人格まで崩壊した30男のトゥルー・ロマンスとして見れば、静岡県笛竹村を舞台にした『ワイルド・アット・ハート』である。観る者のハートによって、サラマンドル、いや、カメレオンのように変化する映画……。

後世、井伏鱒二『山椒魚』(29)、カレル・チャペック『山椒魚戦争』(36)と並んで、富永昌敬『パビリオン山椒魚』は「三大山椒魚芸術」と讃えられるに違いない、やも。

さあ、劇場へ走るらっしゃ!

——川勝正幸(エディター)



The Pavillion
 “Sahanandre”
山椒魚
 のパビリオン

脚本・監督: 富永昌敬 出演: オダギリジョー 香椎由宇
 高田純次 麻生祐未 光石研 KIKI キタキマコ 斉藤陽一郎 杉山彦々 津田寛治

音楽: 菊地成孔 主題歌: 万波麻希&菊地成孔「KEEP IT A SECRET」(作詞: 富永昌敬 作曲: 菊地成孔)
 エグゼクティブ・プロデューサー: 甲斐真樹 プロデューサー: 西ヶ谷寿一/スー・ジュン 撮影: 月永雄太 照明: 大庭郭基 録音: 山本タカアキ
 美術: 仲前智治 編集: 大重裕二 スチール: 黒田光一 スタイリスト: 小磯和代/小里幸子 ヘアメイク: 勇見勝彦 助監督: 日垣一博
 制作担当: 平原大志 協力プロデューサー: 齋見泰正 ラインプロデューサー: 金森保 制作フロダクシオン: キリシマ1945 製作: 松下晴彦/御領博
 製作: 東京テアトル/スタイルジャム/ミュージック・オン・ティーヴィー
 配給: 東京テアトル/スタイルジャム 宣伝: ミラクルヴォイス 支援: 文化庁
 [2006/日本映画/35mm/98min/アメリカンヴォイス/カラー/DTSステレオ] ©2006 パビリオン山椒魚パートナーズ

www.pavillion.jp

初秋、ロードショー!!

シネセゾン渋谷
 道玄坂ザ・プライム6F
 03-3770-1721 入替制
www.cinemabox.com